大阪狭山市文化財報告書3

狭山神社遺跡
試堀調査報告書

1990.3

大阪狭山市教育委員会

はじめに

近年、大坂狭山市内におきましても、開発工事の増加にともなって発掘件数も増加する傾向がみられます。もちろんこのような開発に伴う発掘調査に対して万全を期すことは重要ではありますが、それとともに市内に所在する文化財の研究を進めていくことも大切な課題であります。

このような認識に立ち本市教育委員会も市内の諸遺跡の調査研究を少しずつではありますがすすめてまいりました。この報告書に記した狭山神社遺跡につきましても昨年来継続した調査を実施してきております。

文化財を保護すると同時に、その調査研究の中から文化財の今日的な意義を見いだすことこそ本市文化財行政の重要な使命であります。皆様におかれましても、今後とも当市教育委員会の諸活動に、ご支援、御協力のほどお願い申し上げます。

最後に、調査関係者及び協力者に対し、深甚の謝意を表するとともに、今後とも格段のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

大阪狭山市教育委員会
教育長　　上谷　三郎

例　　言

1．本書は、大阪狭山市教育委員会が、市内文化財保護行政の一環として行った大阪狭山市大字半田所在狭山神社遺跡の試掘調査報告書である。

2．調査期間及び調査関係者は下記のとおりである。

調査期間　平成元年５月２９日～６月２０日

調査担当者

市川　秀之（大阪狭山市教育委員会社会教育課文化財保護係）

中村　　弘（狭山池調査事務所）

3．整理・編集は中村　弘が行い、安有美子、吉本和美がこれを補助した。

4．測量図は前年度の測量調査の成果を用いた。また、調査した測量図、平面図等に表示した方位は磁北であり、標高はＯ・Ｐを用いた。なお、測量図中の座標点設置については写測エンジニアリング株式会社の協力を得、その座標は以下のとおりである。

Ａ｛ｘ＝－167,245,000　ｙ＝　－40,400,000｝

Ｂ｛ｘ＝－167,235,000　ｙ＝　－40,400,000｝

Ｃ｛ｘ＝－167,245,000　ｙ＝　－40,390,000｝

5．調査・整理に際しては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表するものである。

上田　睦（藤井寺市教育委員会）、小林義孝（大阪府教育委員会）。

6．また狭山神社の山崎修宮司には調査の全体において大変な協力を得た。

改めて謝意を表したい。

目　　次

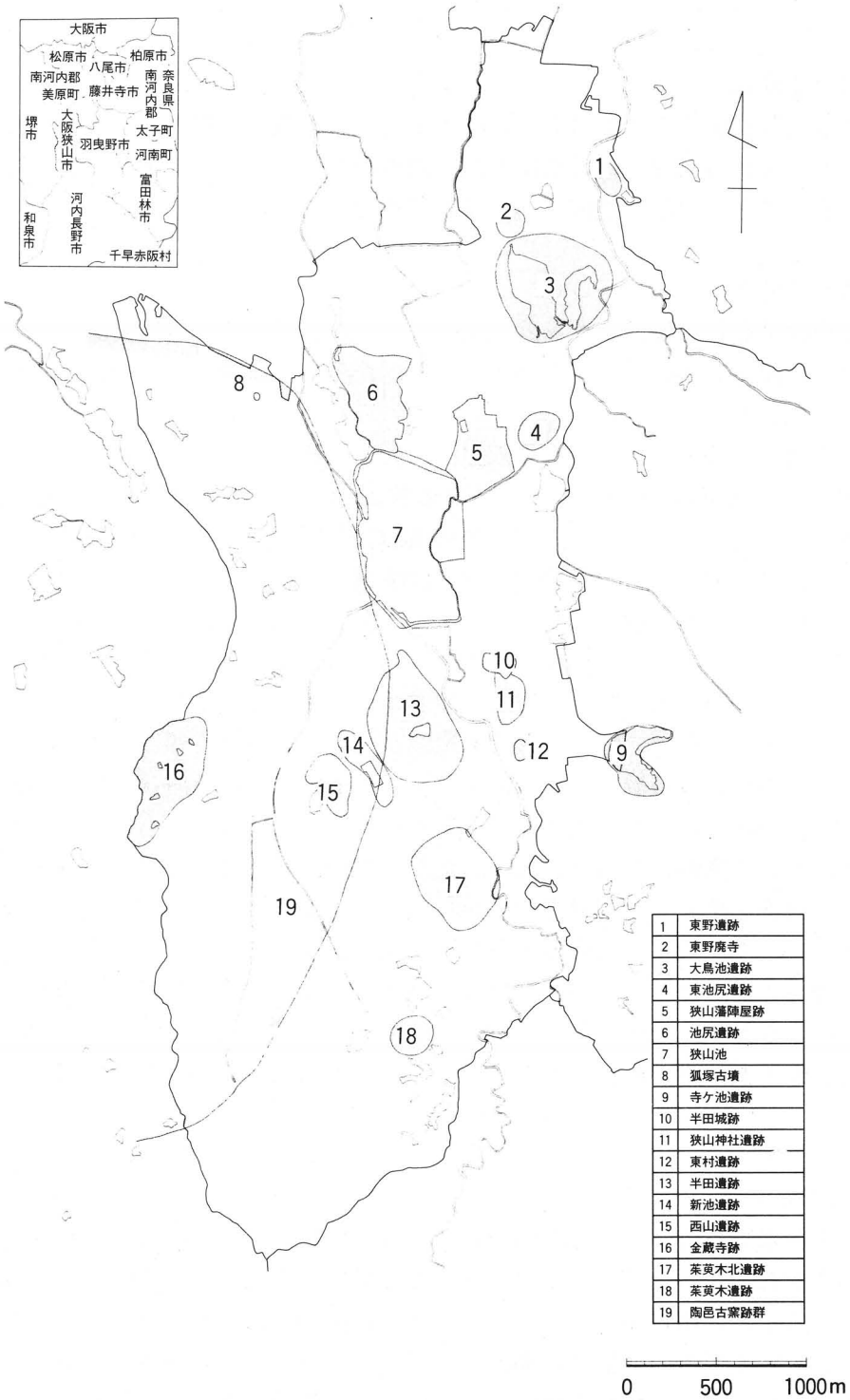
はしがき　　大阪狭山市教育委員会教育長　　上谷三郎
例　　言
1．調査に至る経過 …… 2
2．地理的歴史的環境 …… 2
3．既往の調査 …… 2
4．調査報告 …… 5
5．遺物 …… 9
6．まとめ …… 15

挿　　図

第1図　大阪狭山市内遺跡分布図 …… 1
第2図　トレンチ位置図 …… 3
第3図　トレンチ測量図、土層断面図 …… 4
第4図　第1トレンチ焼土坑実測図 …… 6
第5図　第2トレンチ焼土坑実測図 …… 6
第6図　第2トレンチ瓦出土状況実測図 …… 9
第7図　出土遺物実測図（1）（土器） …… 10
第8図　出土遺物実測図（2）（軒瓦） …… 11
第9図　出土遺物実測図（3）（丸瓦） …… 12
第10図　出土遺物実測図（4）（丸瓦） …… 13
第11図　出土遺物実測図（5）（平瓦） …… 14

図　　版

1．a．第１トレンチ全景（南から）
　　b．第１トレンチ土塁（南から）
2．a．第１トレンチ外側土塁近景（南から）
　　b．第１トレンチ溝、内側土塁（北西から）
3．a．第１トレンチ焼土坑（西から）
　　b．第１トレンチ柱石（北から）
4．a．第２トレンチ瓦出土状況（東から）
　　b．第２トレンチ瓦出土状況（東から）
5．a．第２トレンチ焼土坑検出状況（東から）
　　b．第２トレンチ柱石（北から）
6．a．出土遺物軒丸瓦８－３（１／２）
　　b．出土遺物軒丸瓦上８－７、下８－６（１／２）
7．a．出土遺物丸瓦９－１凸面（１／３）
　　b．出土遺物丸瓦９－１凹面（１／３）
8．a．出土遺物丸瓦10－１凹面（１／３）
　　b．出土遺物丸瓦10－１凹面（１／３）
9．a．出土遺物平瓦11－１凹面（１／３）
　　b．出土遺物平瓦11－１凸面（１／３）



第1図　大阪狭山市内遺跡分布図

1．調査に至る経過

昭和63年度大阪狭山市教育委員会では、文化財保護行政の一環として、これまで明らかにされたことのなかった狭山神社遺跡の測量調査を行った。この成果をふまえて本年度、当遺跡の性格をさらに明確に把握すべく試掘調査を行った。

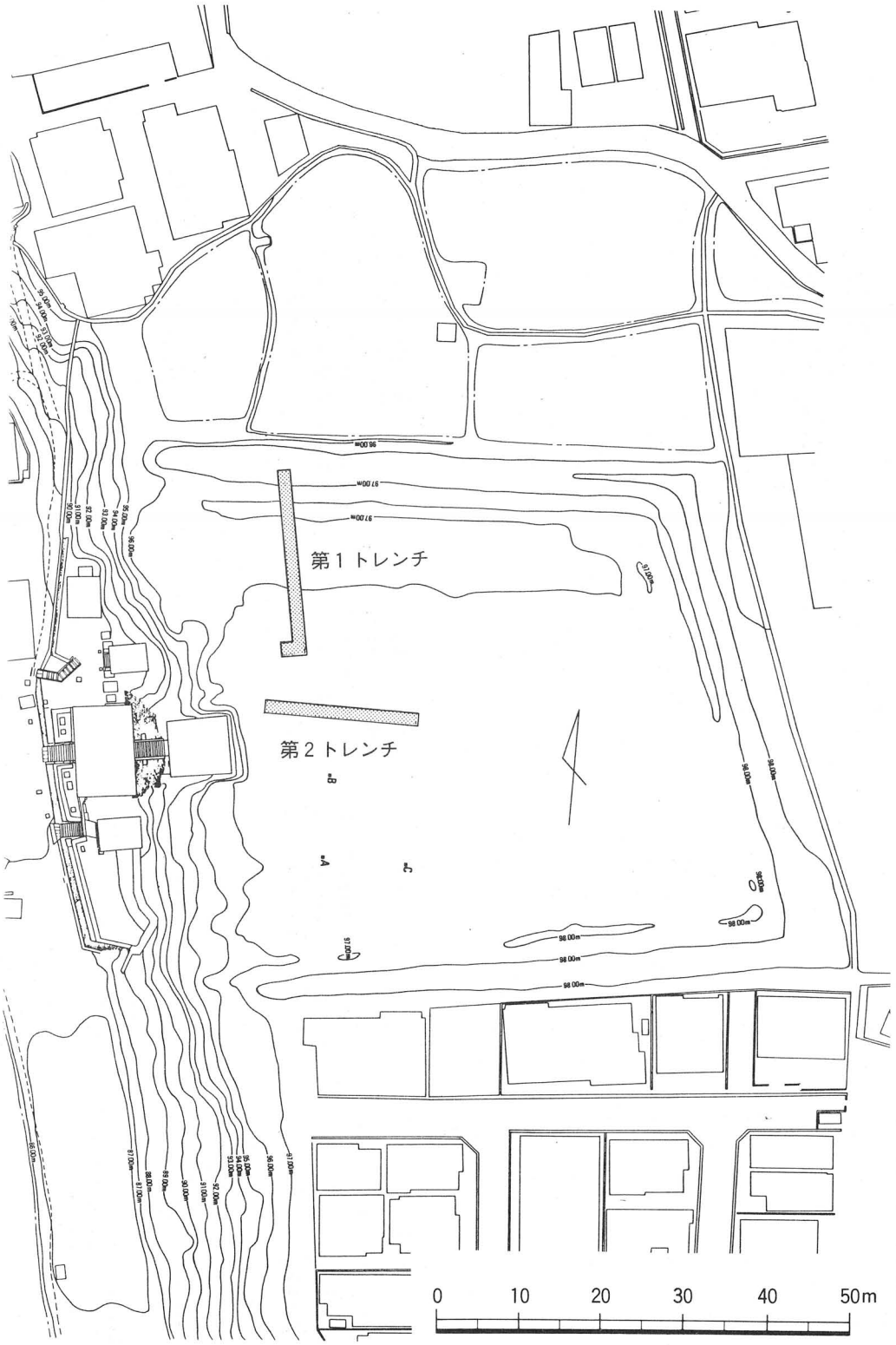
2．地理的歴史的環境

大阪狭山市は羽曳野丘陵、泉北丘陵に挟まれた比較的低位の場所に位置しており、南から北に緩やかに傾斜している。市内の４分の１が丘陵で河岸段丘、開析谷、谷底平野等が点々と分布している。

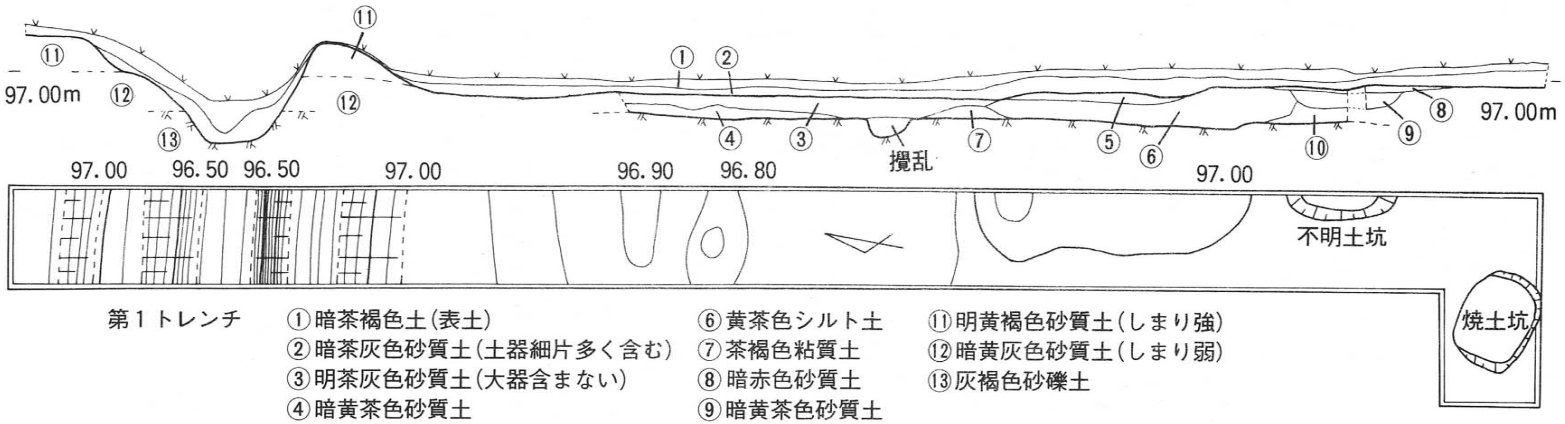
狭山神社遺跡は行政的には大阪府大阪狭山市大字半田に位置し、市内のほぼ中央に位置する。狭山池から南東約500mにあたる。この狭山池には南から西除川（天野川）、三津屋川（今熊川）が流入しているが、狭山神社遺跡は西除川（天野川）の沖積段丘から中位段丘にかけて広がっている。大阪狭山市内では晩期旧石器時代から生活が営まれていたと考えられ、東野、ひつ池、池の原からは、ナイフ型石器が採集されている。また縄文時代についても寺が池、池の原、東村、池尻新池、へど池、上明池、大鳥池から石器が採集されている。しかしながら当該時期の遺構は確認されておらず、土器も見つかっていない。弥生時代についても同様で、唯一、茱萸木遺跡が当時代の遺構を伴う可能性を指摘できるのみである。その後、本市域に開発の鍬が入れられるのは、古墳時代後期、須恵器の産地としてである。市内の西半が陶邑古窯址群陶器山地区のほぼ東端にあたり、市内において現在確認されている窯跡は77個所に及ぶ。ただ、陶邑古窯址群の時間的推移から見ると、初期段階の須恵器を焼成した高蔵寺地区から広がった陶器山地区の波及先であり、須恵器需要の増大によって拡大した須恵器窯分布地の端にあたり、古墳時代の窯の開窯においては後進的な地域であったといえる。奈良時代に入ると、狭山池が南河内の開発において重要な位置を占めるようになり、行基の改修などが行なわれ、狭山池院、尼院が築造された。中世になると池尻城が築かれ、また市内の各地にも点々と遺跡の存在が確認されるようになる。

3．既往の調査

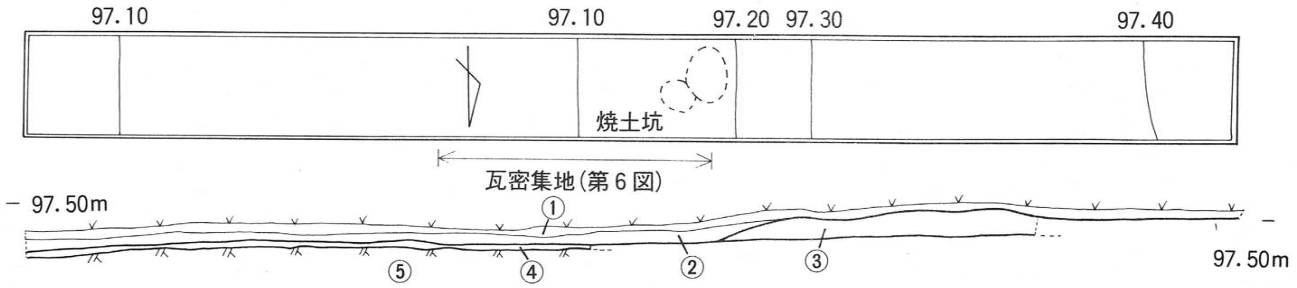
大阪狭山市教育委員会は、昨年度の昭和63年６月１日から６月28日にかけて狭山神社遺跡の測量調査をおこなった。その結果、狭山神社裏山の宮山に一辺約60mの土塁がコの字型に回っていることが明らかとなった。土塁は段丘崖側には認められず、土塁と段丘崖によって囲まれている場所の面積は約3600㎡を測る。土塁の内側と外側には溝がめぐっている。採集遺物より、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構が存在すると思われた。



第2図　トレンチ位置図



第1トレンチ
①暗茶褐色土(表土)
②暗茶灰色砂質土(土器細片多く含む)
③明茶灰色砂質土(大器含まない)
④暗黄茶色砂質土
⑤暗灰色シルト土
⑥黄茶色シルト土
⑦茶褐色粘質土
⑧暗赤色砂質土
⑨暗黄茶色砂質土
⑩茶褐色シルト土
⑪明黄褐色砂質土(しまり強)
⑫暗黄灰色砂質土(しまり弱)
⑬灰褐色砂礫土



第2トレンチ
①暗茶褐色土(表土)
②暗茶灰色砂質土
③明茶褐色砂質土(瓦含む)
④明茶灰色砂質土
⑤灰褐色砂礫土

第3図　トレンチ測量図・土層断面図

4．調査報告

今回の調査は保存を目的としているため、少ない範囲でしかも遺跡の状況が把握できるように試掘をおこなった。そして、旧地形が比較的良好に残っている中位段丘面上の宮山において

1．土塁と溝の性格

2．土塁に囲まれた範囲の遺構の確認

3．その他の時期の遺構の確認

の3点を主な調査目的とした。

トレンチは基本的に東西方向と南北方向に2本あけた。しかし、当遺跡内には種々の木々が茂っており、東西に通るようなトレンチをあけることが困難であったため、樹木を避けてトレンチの方向を若干傾けた。

（第1トレンチ）

土塁と溝の状況を把握するため、最も良好に遺存している北側に、横幅1.5m、長さ22.5mのトレンチを設置した。基本層序は上層から、表土、暗茶灰色砂質土、茶灰色砂質土、暗黄茶色砂質土であり、地山は灰色の礫混じり砂質土層である。このトレンチからは柱石、焼土坑、不明土坑、土塁、溝が検出された。今回の調査は保存を目的としているため、土塁、焼土坑、柱石については現状保存をし、掘り残した。堆積土が少なく浅かったため層位的な発掘が困難であったが、おおよそ3つの遺構面が確認でき、上層から近世、中世、中世以前の3時期に対応すると考えられる。以下、古い時期から順にその状況を報告する。

①中世以前

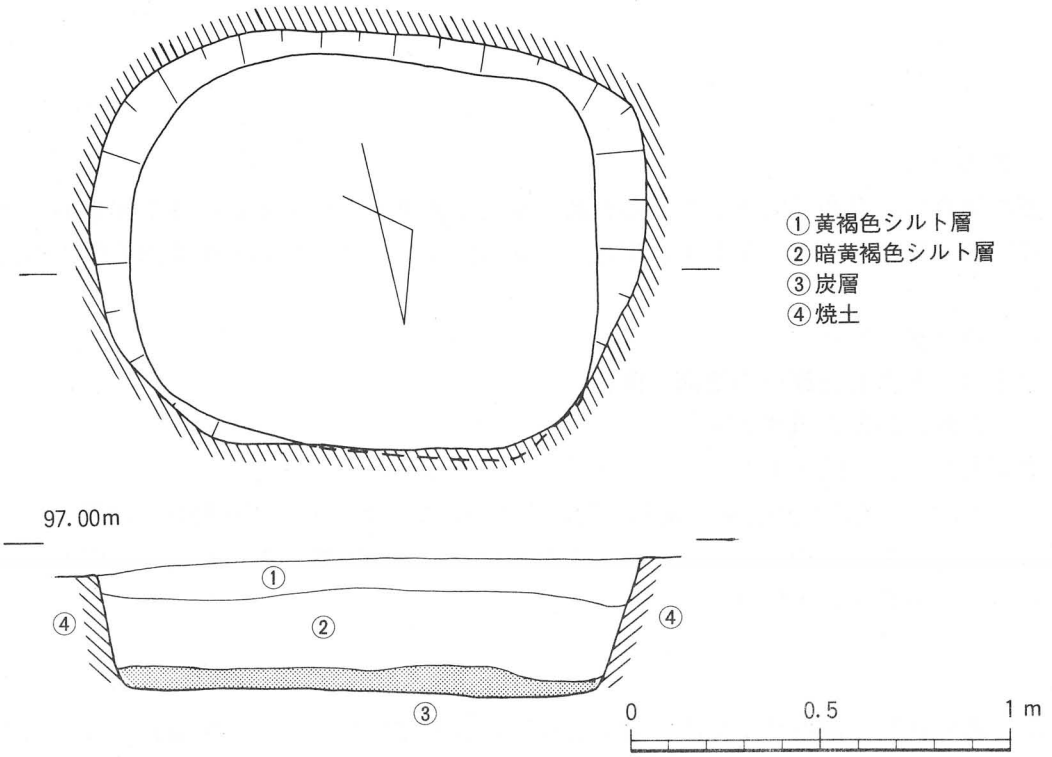
遺物が全く出土していないので、明確な時期は不明であるが、中世の層の下から土坑が検出され、中世以前の遺構が存在すると考えられる。ただ、遺物が出土しておらず、また、広範囲に発掘していないため断定はできない。検出された土坑は発掘区内にその一部が認められるのみであるが、長径約60cmの楕円形を呈するようで、深さは約30cmある。地山の灰色砂質土層を掘り込み、埋土は灰褐色砂質土である。

②中世

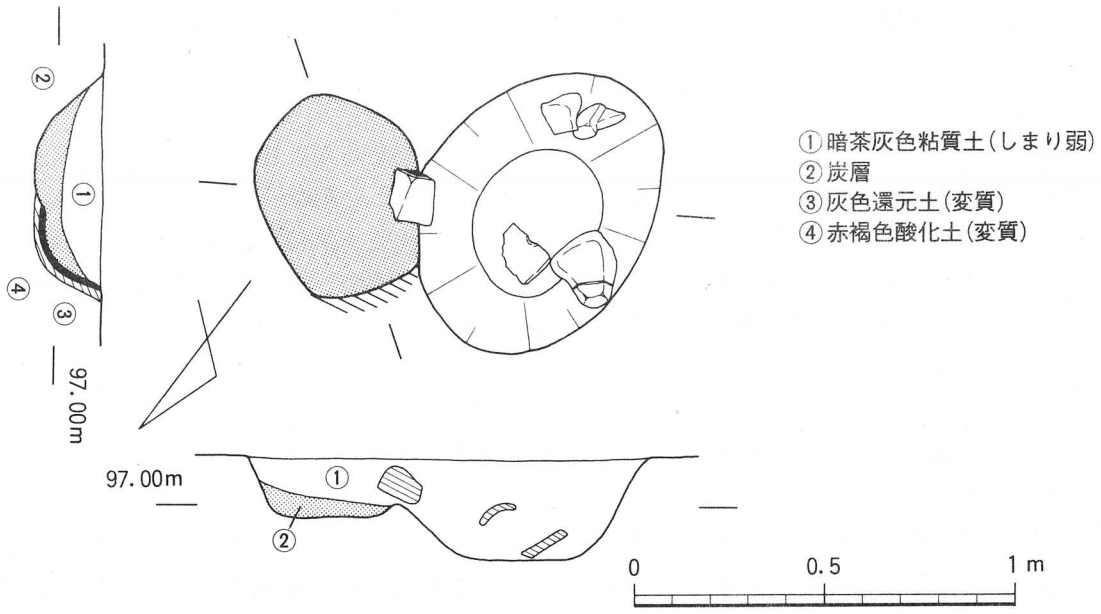
中世期の遺構は土塁とそれに伴う溝、基壇状遺構、焼土坑、不明土坑がある。

（a）土塁

発掘区の北端から検出された。調査以前からも確認できるほど明確に残っており、遺跡地の内外に2重にめぐる。外側の方が若干高く、遺構面から約80cmの高さである。土塁の外側は発掘調査地外であるため幅は明確にはできないが、前年度の測量調査から約6mはあると考えられる。内側の土塁は高さは約70cmであるが、幅が小さく160cm程である。土



第4図　第1トレンチ焼土坑実測図



第5図　第2トレンチ焼土坑実測図

塁の構造自体は断ち割っていないので不明であるが、土塁表面の観察から、土塁の基礎となる部分は暗黄灰色砂質土であると考えられる。ただ、この層はしまりが弱く、基礎とするには軟弱であり、この層が地形の整形に伴う盛土なのか、本来堆積していた層なのかは確認できなかった。この層の上に、しまりが強い明黄褐色砂質土がのっている。内側と外側の二つの土塁の間には幅約１ｍの溝が走る。おそらく土塁を構築する際に土取りをしたためにできたものと考えられ、堆積土の状況から少なくとも排水などを目的としたものではないようである。

（ｂ）基壇状遺構

トレンチの中央から南側に認められた。土塁に囲まれた場所のほぼ中央に位置し、全体的に方形壇状を呈している。調査区内では高さは20cm程度確認できるが、他の場所では現状で高さ約40cm認められる。発掘区では暗灰茶色シルト土が、地形を整形するような形で盛土されている。

（ｃ）焼土坑

トレンチの南端において検出された。茶褐色シルト層を掘り込んでおり、長さ約1.5m、幅約1.1m、深さ約0.4mでやや長細い隅丸方形を呈する。埋土は、最下層に暗黒灰色の木炭片を含む炭層が約20cm程堆積しており、その上に暗黄褐色シルト層が約40cm、さらにその上に黄褐色シルト層が約20cm程堆積している。土坑の周壁は、約５cm程、熱のため赤褐色に酸化している。土坑内からはほとんど遺物は出土しておらず、流入土と考えられる上の２層に直径３～５cm程度の礫が20数個、須恵器甕胴部の破片１点と、中世と思われる土器の細片が若干混じるのみである。

（ｄ）不明土坑

トレンチ南端、焼土坑から約２ｍ北東に位置し、確認できる範囲で長さ1.6mを測るが、幅は発掘区外であるため不明である。焼土坑と同一面から掘り込まれており、層位的には同時期と考えられるが、その関係は明らかでない。埋土は暗黄茶色砂質土の一層のみである。

③近世

表土直下から出土した柱石と中世段階に掘削された土塁間の溝をさらに掘り込んだ溝がある。

（ａ）柱石

第一トレンチには一基のみ遺存していた。長さ約20cm、幅約16cm、高さ約８cmを測る角の丸い不正の直方体を呈す。特に掘り方は認められず、暗黄色シルト層の上に直接おかれていたが、柱石を安定させるかのように、凹面に布目、凸面に縄目の調整痕をもつ平瓦の破片が石の周囲３辺におかれていた。

（ｂ）溝

土塁間にある中世段階に掘削された溝をさらに掘り込んでいる。中世に掘削され、暗茶灰色砂質土が堆積した後、さらに掘削し、その上に表土が堆積している。その状況から近世の掘削と考えられる。遺物としては表土下から近世期の瓦が、表土内から近代の瓦、瓦質のあんかが出土している。

（第二トレンチ）

遺跡内中央に位置する基壇状遺構と，第一トレンチで出土した柱石の広がりを確認するため段丘崖に直交するよう東西に、長さ18m、幅1.5mを設定した。層序は、基本的には第一トレンチと同じで、上層から、表土、暗茶灰色砂質土、茶灰色砂質土となり、その上面まででとめた。遺構面も第一トレンチと同様であるが、中世以前の遺構は確認されなかった。また、遺構の保存のため遺構の検出された場所は掘り残した。以下、古い時期から順にその状況を報告する。

①中世

焼土坑が検出されたが、第一トレンチで検出されたものとは様相が異なり、上部が削平されている。現状で長径約60cm、短径約40cm、深さ約20cmと小規模で、だ円形を呈する。茶灰色砂質土を掘り込んでおり、内部は全て炭層で出土遺物は見られない。熱を受けたことによって周壁の北西側のみ変質している。貼土をしたためか内側が灰色に還元焼成され、その外側は赤褐色に酸化している。この焼土坑の南西側に接して長径約80cm、短径約60cm、深さ約30cmの土坑が検出された。土坑内からは20cm程の円礫と、布目、縄目の調整痕をもつ瓦が10片ほど出土した。両土坑の前後関係は層位的には同じであるが、その切り合い関係から、最初に焼土坑が、後に土坑が掘られたと考えられる。

②近世

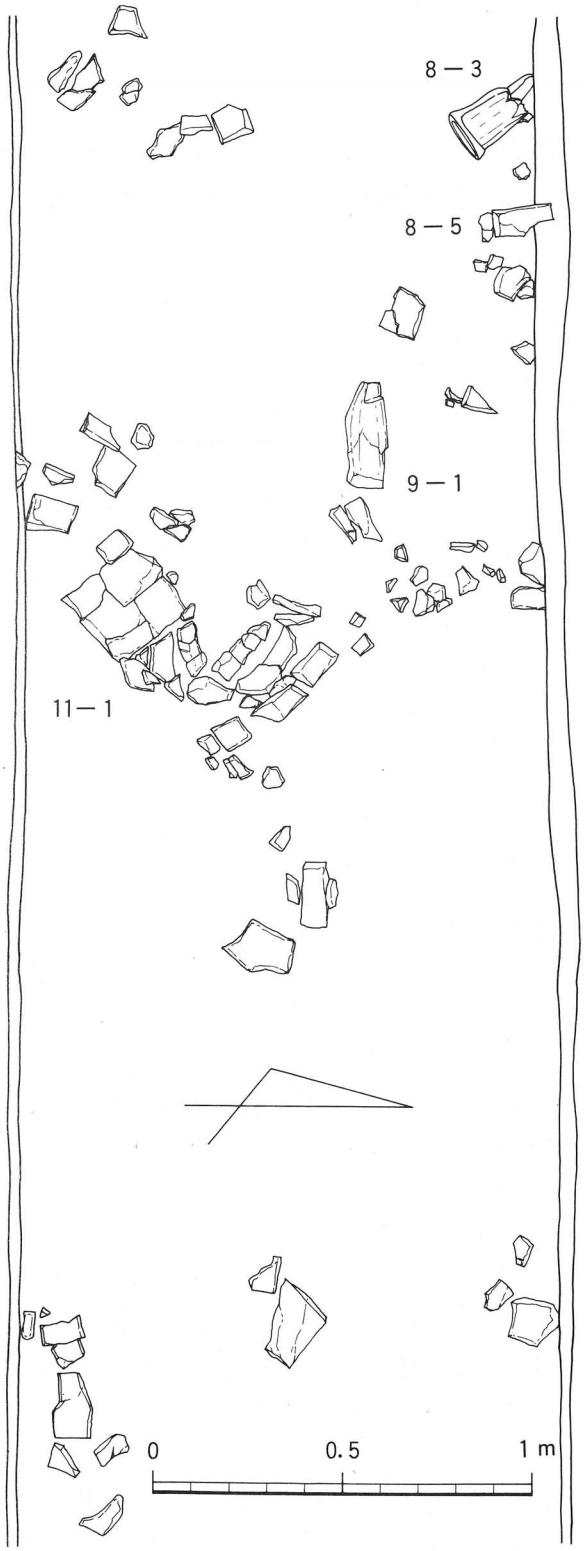
近世期の遺構としては、基壇状遺構、柱石が検出された。

（a）基壇状遺構

第一トレンチで検出されたものとは別であり、中世期の焼土坑、土坑の上を覆うように盛土され、約30cm程の高さである。現状でも壇状に遺存しているのが確認でき、長さ約14m、幅約10mを測る。盛土は暗黄褐色砂質土であり、やや固い。東側斜面からは、中世段階の瓦が密集して出土した。完形もいくつか見られたが、ほとんどが細片である。傾斜部の盛土内からも多量に出土しており、盛土をする際同時に埋め込み、盛土の安定を意図したようである。いずれにしてもこの瓦は二次的に移動されたものと考えられ、本来的な場所ではないようである。

（b）柱石

基壇状遺構の盛土上におかれており、長さ40cm、幅20cmを測り、上面が平らで扁平な石



第６図　第２トレンチ瓦出土状況実測図

である。特に掘り方もなく、第一トレンチで検出された安定させるような事がされていないので柱石であるとは断定できないが、それとの関係より柱石と考えた。

５．遺物

遺物は近代の瓦、こたつ、近世の瓦、中世の土器、瓦、があるが、近代・近世の遺物については実測不可能であるため、ここでは図化できた中世の遺物についてのみ述べることとする。

（土器）

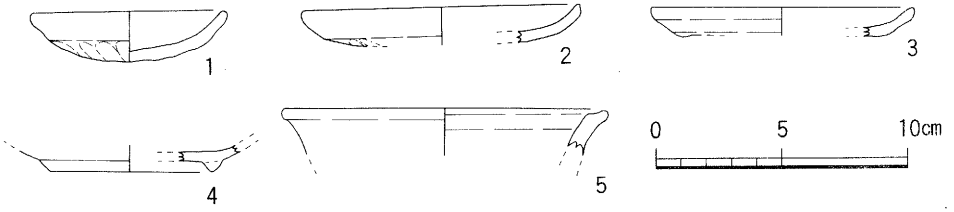
須恵器、土師器、瓦器の３種類が出土している。須恵器は焼土坑上面から出土した甕の体部の破片１点のみであるが、それも流入してきたものであろう。土師器、瓦器は比較的多く見られたが、軟質であるため取り上げが困難で、発掘時にその大半が失われた。また、かろうじて取り上げられた遺物についてもほとんどが細片で、図示できるものはわずかであった。

①土師器皿

３点のみ図化し得た。直径約11cm、高さ約1.5cmの大型と、直径約８cm、高さ約２cmの小型の二種類ある。調整はいずれも同じで、底部は指押さえ、口縁部付近は横ナデにより調整されている。全体の形態的特徴は、大型が、扁平で口縁部で大きく屈曲しているのに対し、小型では、底部が丸く、緩やかに内湾している。

②土師器椀

1点のみ出土した。底部の破片で、断面三角形の高台がついている。底部は平らで、体部へと緩やかに屈曲する。高台径6.5cmを測る。調整は表面が剝離しているため明確にしがたいが、横ナデ調整と思われ、高台を貼りつけている



第7図　出土遺物実測図1（土器）

③瓦器

図化不可能である。おそらく椀の口縁部付近であろう。口縁は丸く仕上げられ、端部に沈線はみられない。調整は器表が荒れているため不明で、暗文等も見えない。

④瓦

ここでは中世の瓦のみ図示する。いずれも、第二トレンチの盛土から出土したものである。

（a）軒丸瓦

全て同型式で、内区の文様は左まわりの三つ巴文とその周囲の1重の圏線により構成される。巴はそれぞれ半周し、互いに接しない。先端部は尖り、三角形を呈している。丸瓦との接合は、半分ほど瓦当の笵型に粘土を充塡し、その後丸瓦部を挿入し、残りの粘土を充塡している。接合部はナデが行われているだけで、きずは付けられていない。全体的に雑な作りである。

（b）軒平瓦

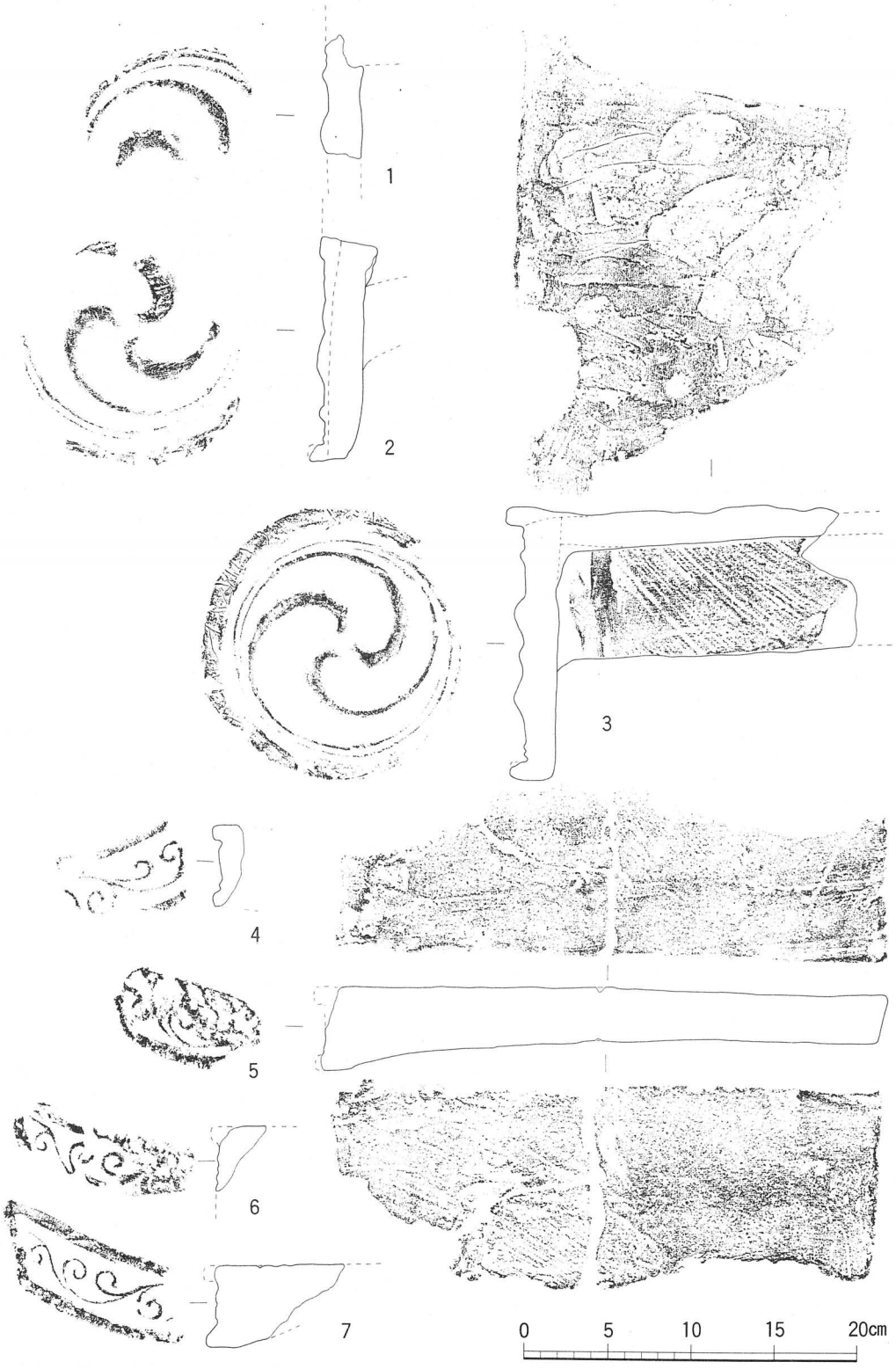
全て同型式で、内区の文様は均正唐草文で、周縁部付近で完結せず、さらに左右へ広がり、周縁部に取り込まれている。唐草文は肉厚でほぼ左右対称である。明確な顎はなく、緩やかな曲線を描く。

（c）丸瓦

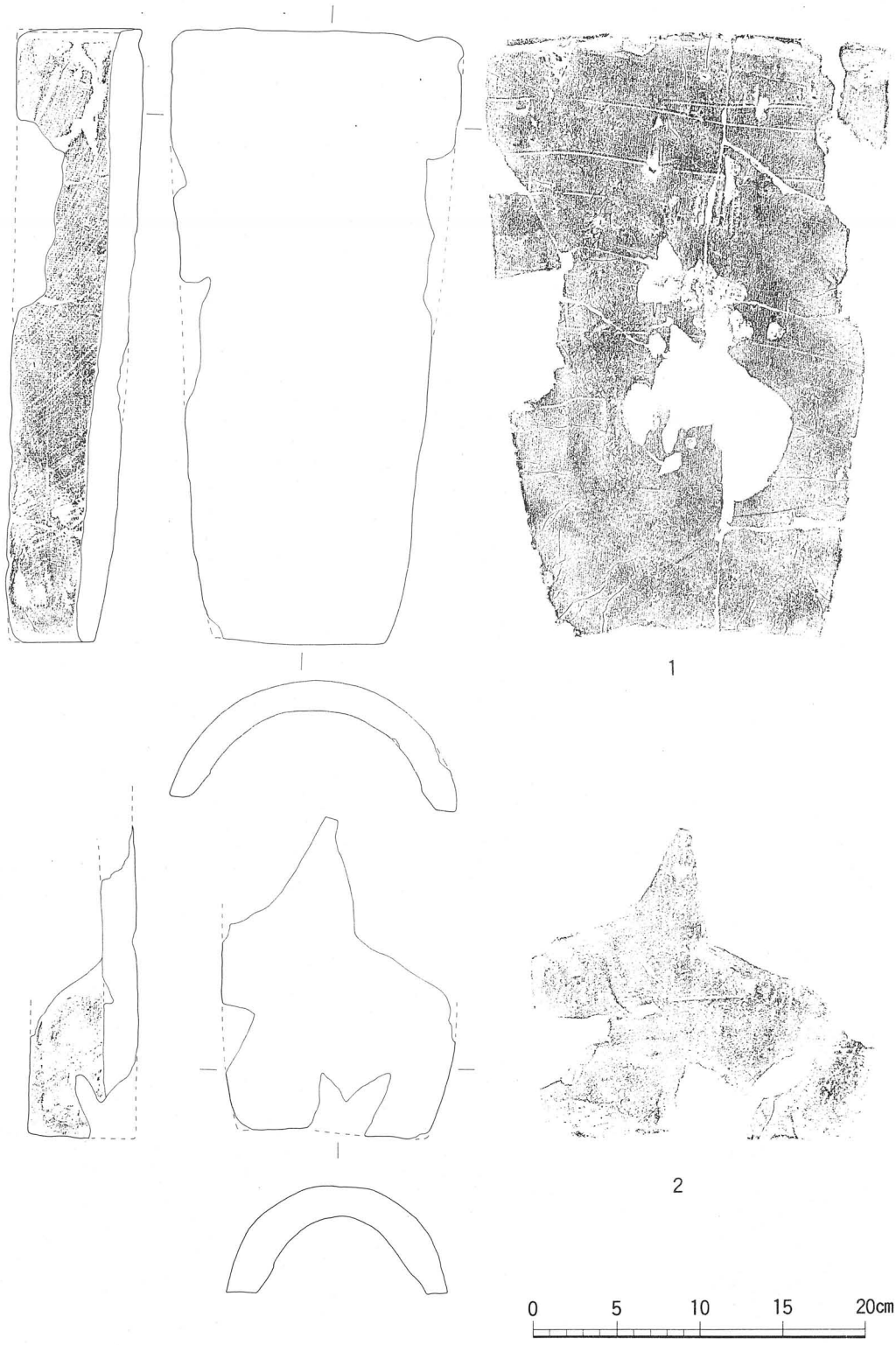
確認されるもの全て行基葺きで、玉縁の破片も認められない。凸面は縄目叩きの後ケズリをおこなっている。凹面は全体に布目痕が残っており、側縁部と狭端面部は面取りにより消されている。色調は全体に暗灰色であるが、両側縁部と平行する個所が灰白色であり、丸瓦どうしを重ねて焼成、あるいは燻したためにできたものと思われる。

（d）平瓦

全て破片で、全体の形状は不明である。凹面には全体に布目痕が残っており凸面には縄目叩き痕が深く明瞭に残る。色調が青灰色で硬質のものと、淡橙色で軟質のものの2種類存在する。

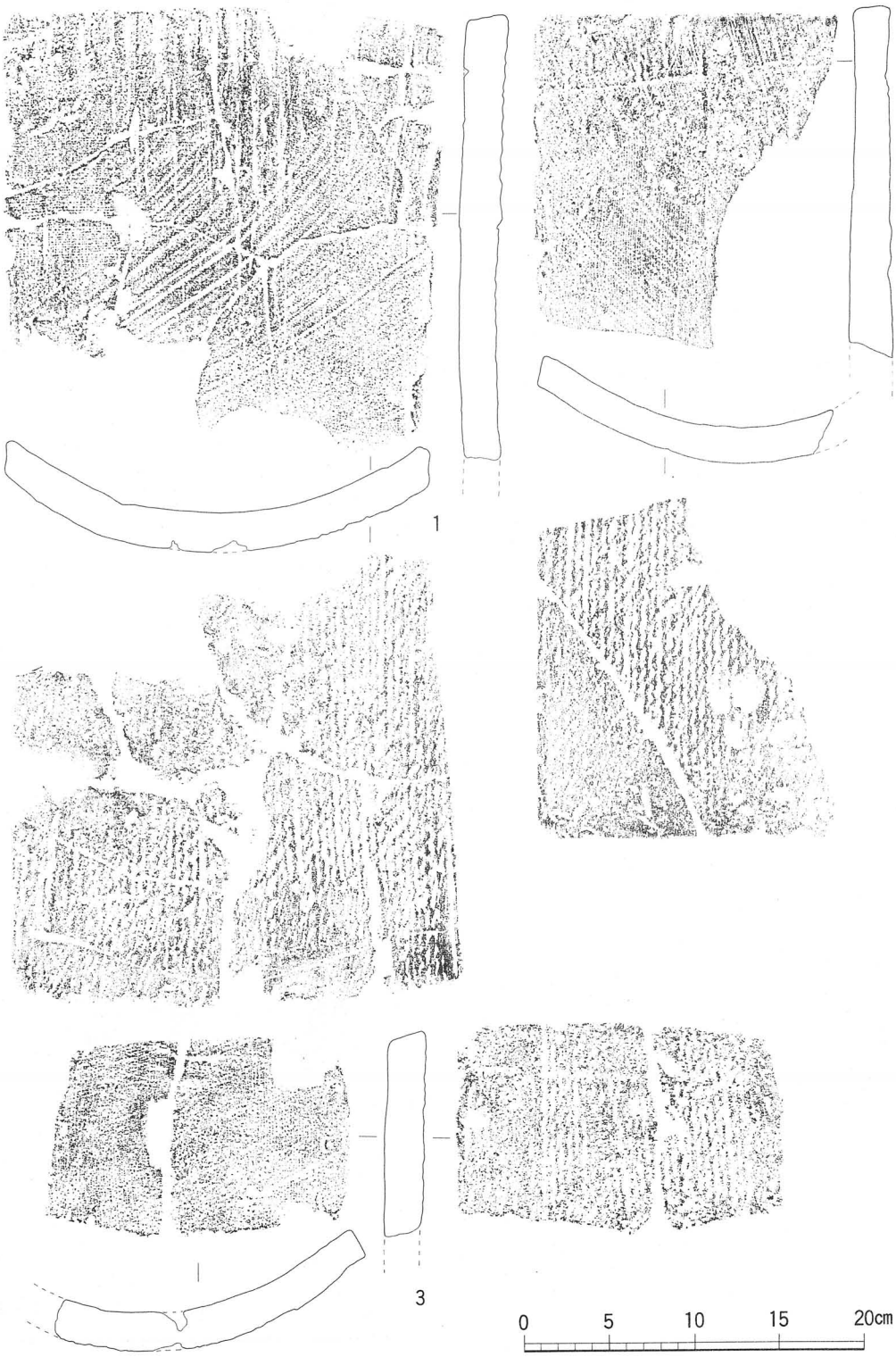


第8図　出土遺物実測図2（軒瓦）



第９図　出土遺物実測図３（丸瓦）

第10図　出土遺物実測図４（丸瓦）



第11図　出土遺物実測図５（平瓦）

6．まとめ

今回の試掘調査により狭山神社遺跡は中世以前、中世、近世の三時期の遺構の存在が明らかとなった。ただ、それぞれの遺構の性格は明確にはできない。特に中世以前の遺構については遺物も出土していないことから、その存在さえも断定できない。また、中世の遺構に焼土坑が２つあるが、これらについても、まわりとの状況を総合的に判断する必要があり、今後の調査に期待がかかる。ただ、一仮説としては、第一トレンチの大型の焼土坑は、土塁の存在、立地等から考えてのろし台址と考えられる。北接する半田城遺跡の存在や、小字名に残された「城」という地名の存在からも、城塞機能のある遺跡が存在していたことは当然考えられよう。しかし、第二トレンチで検出された焼土坑は構造的にそれとは全く異なっており、小規模で貼土も認められ、高温度で焼成されていたような状況である。そのことから考えて、鋳造遺構の一つである可能性も存在する。狭山には古くから鋳物師が存在していたことが明らかとなっている。香取秀真によると12～13世紀頃から河内に鋳物師が存在し、そのうちかなり多数は河内に、特に丹南郡の野中・丹下・丹上・菅生・黒山・狭山・土師の七郷に分布し鋳造に従業していた。もっとも、この「狭山」が現在の行政区分と一致するとは言えないが、近代にも狭山東方の富田林市に属する羽曳野丘陵から鋳工の型土が採土されており、当地域周辺が鋳物に適していた事は明らかである。そのことを考え合わせ、第二トレンチの焼土坑は鋳造遺構とするのが妥当であろう。ただ、現在、鋳造遺構の発掘例は美原町・富田林市に集中しており、大阪狭山市内からの検出は初めてであるため、今後の検討を要する。また、今回出土した瓦はその形状から平安時代から鎌倉時代にかけてのものと考えられるが、それに対応する遺構が検出されておらず、量的にみても少ないため、他の場所から運ばれてきたものと考えられる。なお、上述したように、丸瓦に見られる煤状の暗灰色の色調は、従来言われていたような使用時の火災によるものではなく、生産時に瓦を重ねているときにできたものである。調査区から焼土面が検出されなかったのも、その証となろう。

以上のように、今回の試掘調査により新たな事実が判明した。しかし、全体の状況は明らかにされてないため、遺構、遺跡の性格も含めて、今後の検討が必要である。

〈参考文献〉

狭山神社測量調査報告書　大阪狭山市教育委員会　1989年
狭山町史　狭山町史編纂委員会　1967年
大阪狭山市史要　大阪狭山市役所　1988年
歴史時代の地理的環境　日下雅義　1980年

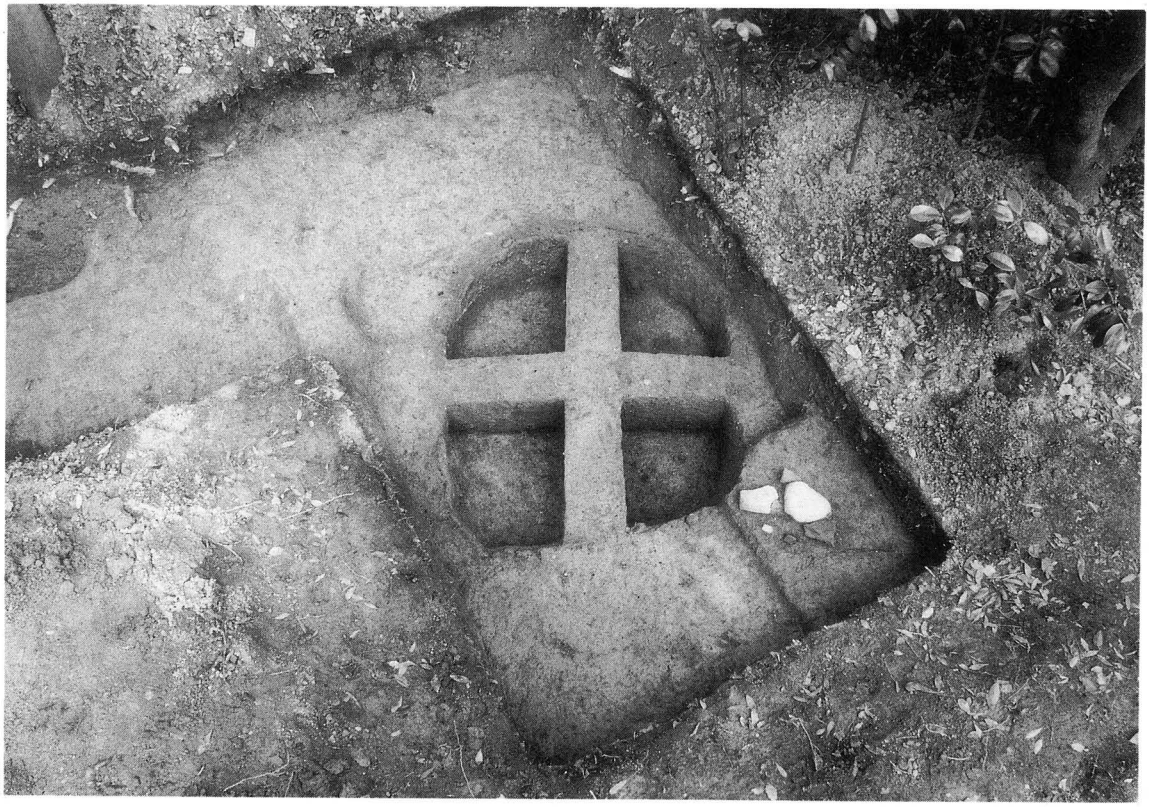
図　　版

a．第１トレンチ全景(南から)

b．第１トレンチ土累(南から)

a．第１トレンチ外側土累近景(南から)

b．第１トレンチ溝、内側土累(北西から)



a．第１トレンチ焼土坑(西から)

b．第１トレンチ柱石(北から)

a．第2トレンチ瓦出土状況(東から)

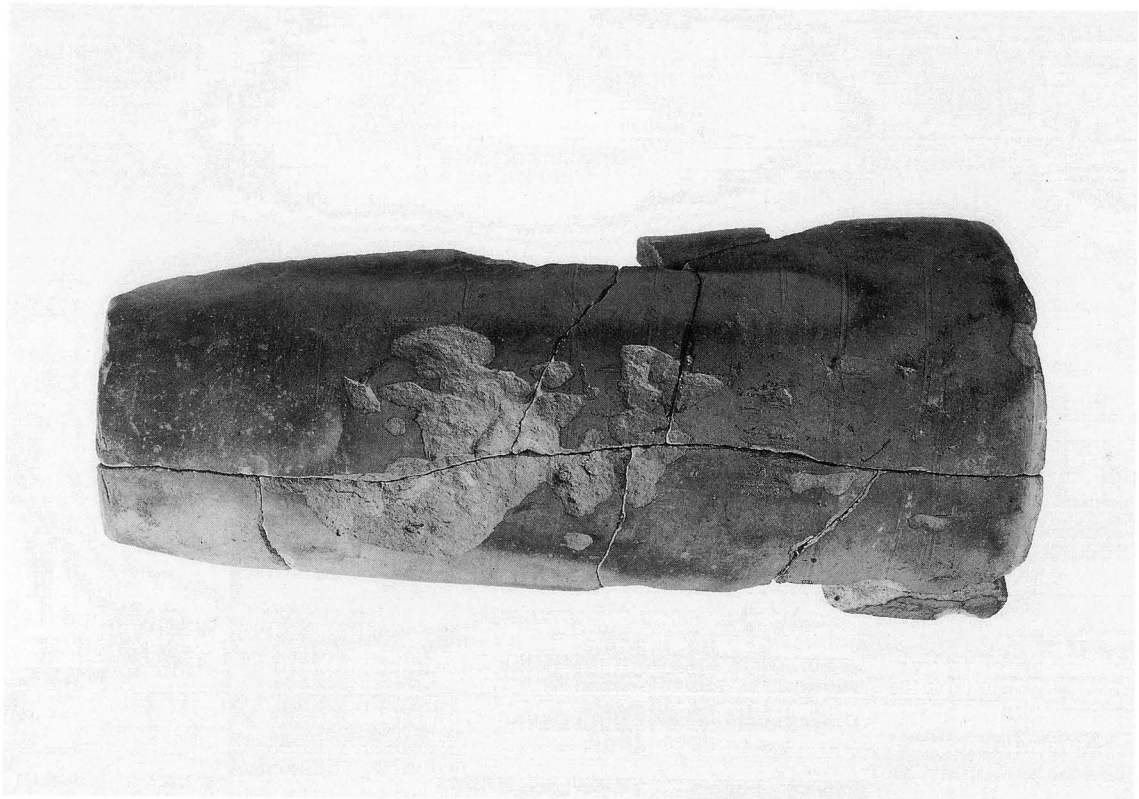
b．第2トレンチ瓦出土状況(東から)

a．第２トレンチ焼土坑検出状況(東から)

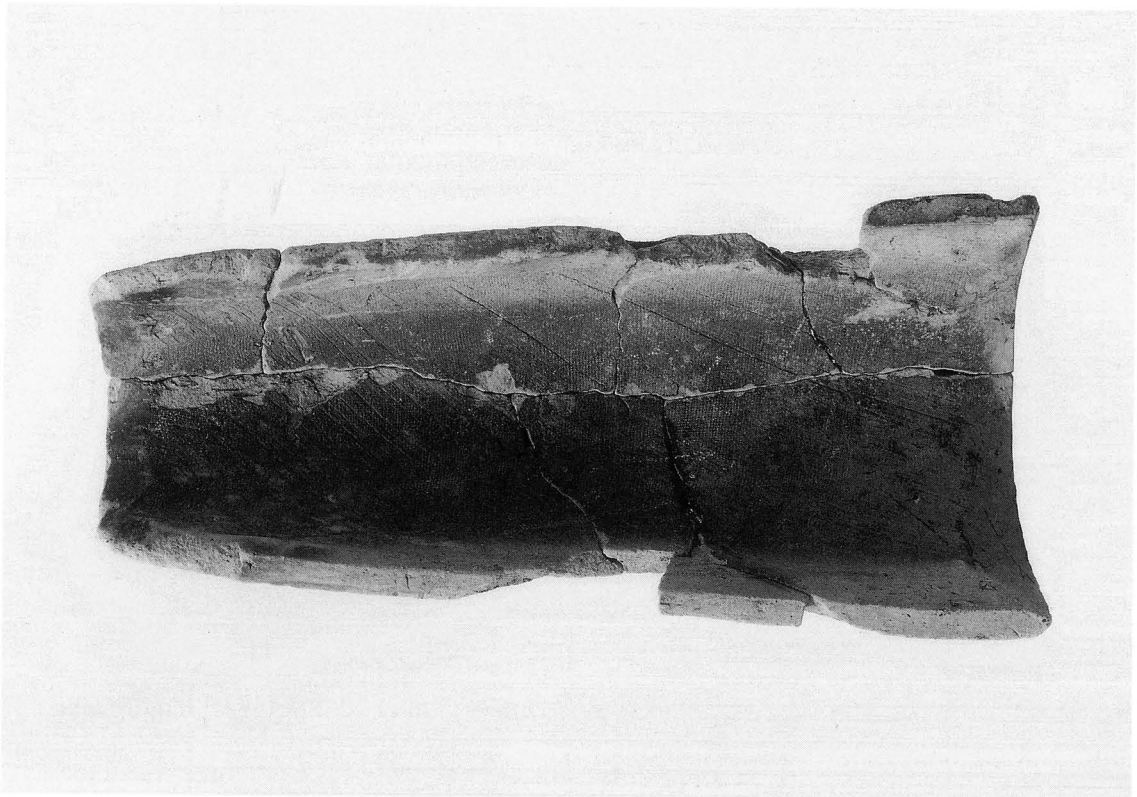
b．第２トレンチ柱石(北から)

a．出土遺物 軒丸瓦 8 — 3 (1/2)

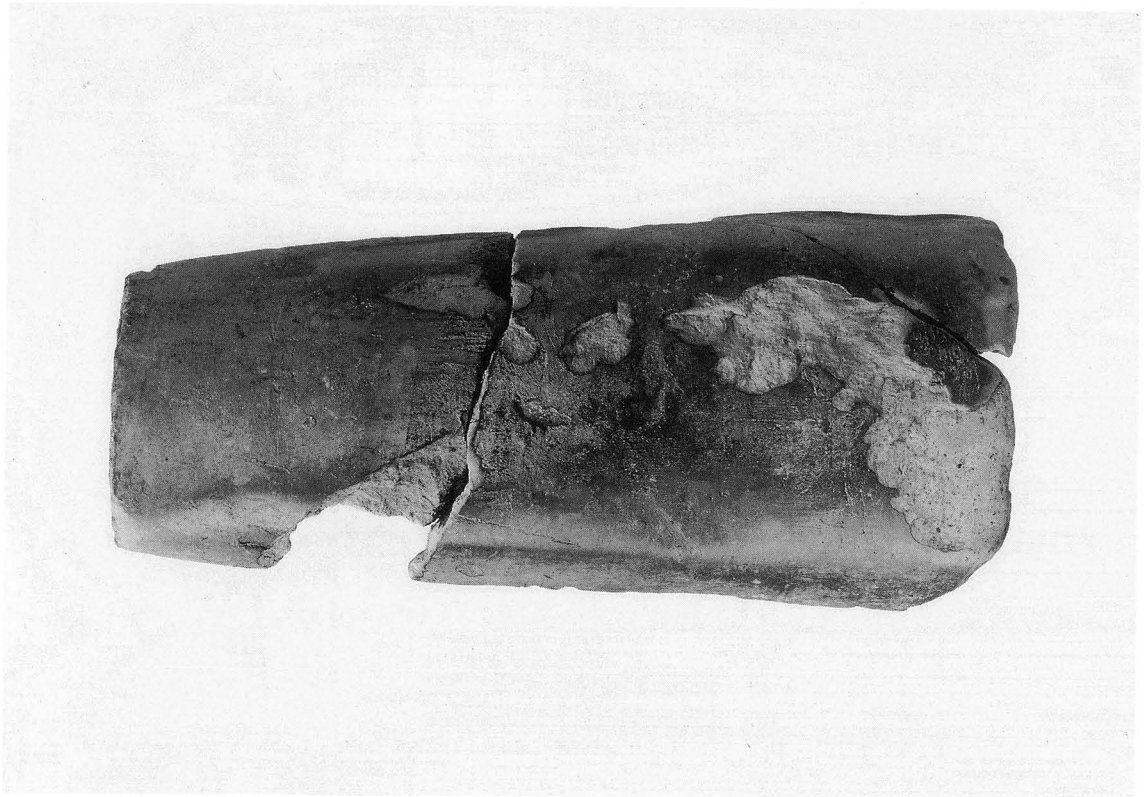
b．出土遺物 軒平瓦・上 8 — 7・下 8 — 6 (1/2)



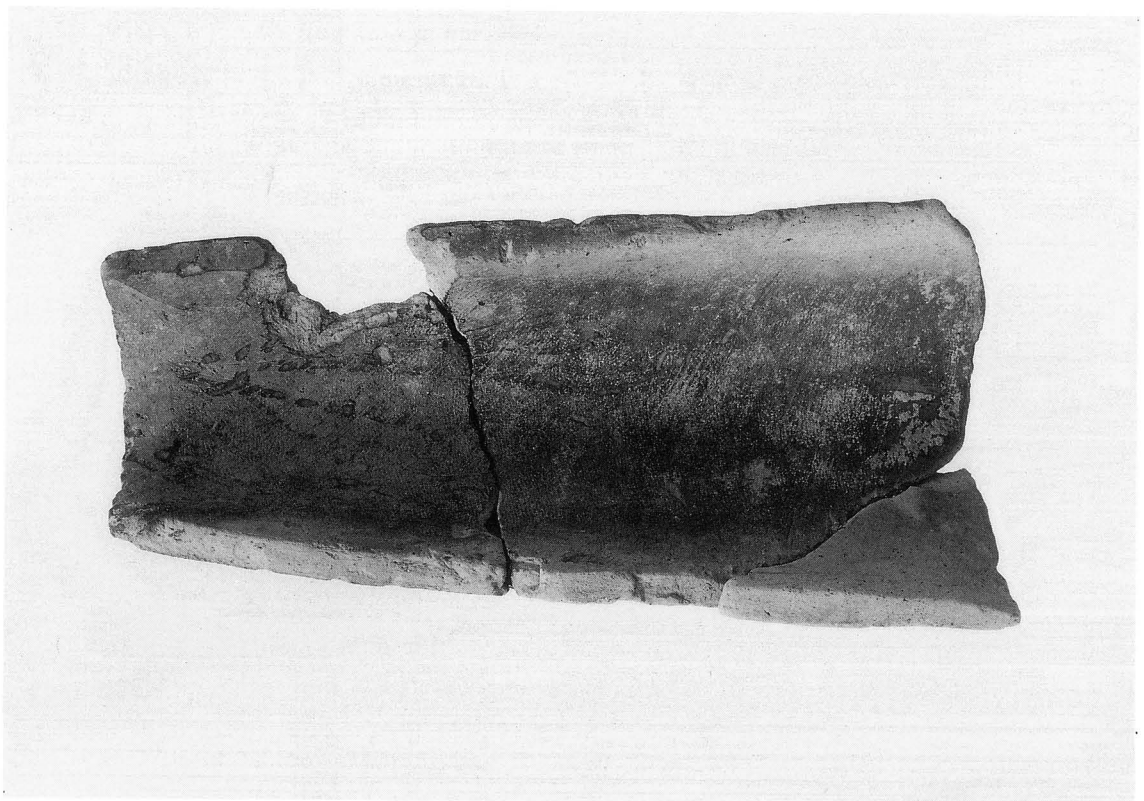
a．出土遺物 丸瓦９－１凸面(1/3)



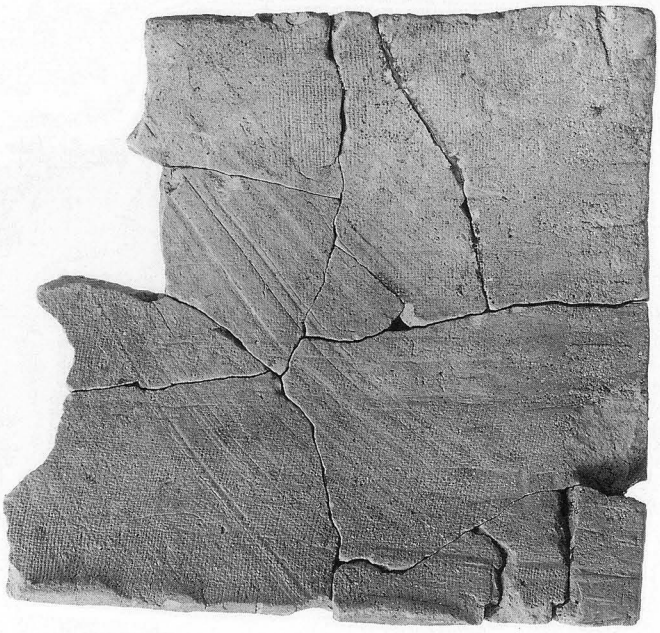
b．出土遺物 丸瓦９－１凹面(1/3)



a．出土遺物 丸瓦10－1凸面(1/3)



b．出土遺物 丸瓦10－1凹面(1/3)



a．出土遺物 平瓦11－1凹面(1/3)

b．出土遺物 平瓦11－1凸面(1/3)

大阪狭山市文化財報告書3
狭山神社試掘調査報告書
発行　1990年3月31日
編集　大阪狭山市教育委員会
〒589　大阪狭山市狭山一丁目
2384番地の1
tel　0723－66－0011